

「法助動詞の教え方」覚え書

鷹家 秀史

本論は高校で助動詞（特に法助動詞）を教える際、従来、あいまいな説明に終始していた点を明瞭にし、また最新の研究成果のうち高校の授業で役立ちそうな点に絞って説明しようとする試みである。高校生に教えるという観点から、厳密さより生徒の分かりやすさを優先して説明することにする。

1. 「法助動詞」の「法性」とはどういうことか

一般に、can, may, mustなどを法助動詞(modal auxiliary)と呼ぶが、そもそも「法性(modality)」とは何かを最初に説明する。そうすれば、法助動詞が英文法全体の枠組みの中で占める正当な位置を正しく理解することが可能となるはずである。

1.1 「法性(modality)」と「法(mood)」

「法性(modality)」の概念は多様で文法学者の数だけその定義が存在すると言われるほどである。ここでは、高校で教えられる代表的な助動詞 can, may, must, should, willなどの意味をカバーする可能な限り広範な定義を採用する。小池(2003:294)によれば、「法性(modality)」とは「命題」「事象」の必然性・偶然性、可能性・不可能性、及び、「命題」「事象」に対する話し手の心的態度を表す意味的なカテゴリーである。法助動詞を中心に、一部の動詞(seem, appear...), 形容詞(possible, necessary, likely, permitted, willing...)や文副詞(possibly, probably, necessarily...)を用いて表す。それに対して、「法(mood)」は「命題」「事象」に対する話し手の心的態度を表す「文法的なカテゴリー」である。「法(mood)」は、一般に、動詞の屈折形式の違いによって示される。

以上のことから、法助動詞を用いない以下のような動詞、形容詞、副詞を用いた英文も「「命題」「事象」の必然性・偶然性、可能性・不可能性、及び、「命題」「事象」に対する話し手の心的態度を表す」ことが可能なので「法性(modality)」を表していることがわかる。

Larry **seemed** pretty angry to me./ It **seems** to me you don't have much choice.

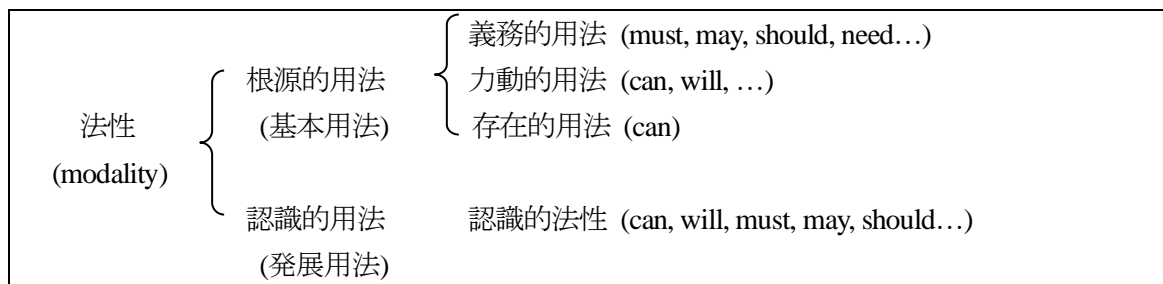
Is it **possible** to predict what will happen in Russia?

It's **possible** that she might have got lost on the way home.

Probably the best way to learn Spanish is by actually going to live in Spain.

1.2 modality の分類

上の定義から、法助動詞を用いて表す「法性(modality)」を、大きく「根源的用法」(「命題」「事象」の必然性・偶然性、可能性・不可能性を表す)と「認識的用法」(「命題」「事象」に対する話し手の心的態度を表す)に分類することができる。高校生には、can, may, mustに関して中学校段階で学習した意味・用法を「助動詞の基本用法」、高校で学習する意味・用法を「助動詞の発展用法」と説明するのが望ましい。



2. 根源的用法と認識的用法の統語的な相違

ここでは Coats (1983) にもとづいて、根源的用法と認識的用法に見られる違いをまとめる。

＊

①命題志向的な認識的用法と主語志向的（事象志向的）な根源的用法：認識的用法では命題そのものの必然性、真偽性、確実性に対する判断が述べられるのであるから、態が転換されても基本的な命題内容は変わらないが、根源的用法では主語が持つ事象遂行能力や遂行義務を述べるのであるから、態の転換は意味解釈の変化を通常伴う。

He **will** answer the letter. (返事を書くつもり/ 返事をするだろう)

The letter **will** be answered. (*返事は書かれるつもり/ 返事は書かれるだろう)

また、認識的用法では、否定辞は命題を否定し法性を否定しない。他方、根源的用法では否定辞は法性を否定する場合が多い（ただし、認識的用法の「蓋然性」を表す Can [Could] ~?/ cannot [couldn't] ~では否定辞は法性（蓋然性）を否定している）。

You **may not** come in. (not は may 「してもよい」を否定して、「してはいけない」を表す)

She **may not** be at home now. (not は she is at home now. という命題を否定)

He **cannot** speak English. (not は can 「できる」を否定して、「できない」を表す)

His story **cannot** be true. (not は can 「蓋然性がある」を否定して、「蓋然性がない」を表す)

②法助動詞が完了形・進行形を伴う認識的用法：根源的用法では法助動詞は進行形、完了形を伴わないが、認識的用法では進行形、完了形を伴うことがある。

He **must have been** drunk to say that. / You **must be** joking!

③if 条件節には用いられない認識的用法：認識的用法は if 条件節には用いられないが、根源的用法では if 条件節に用いられる。時や条件を表す副詞節中に未来時を表す **will** が用いられないのはこのためである。

*If it **will** rain, he will be at home. (最初の will は認識的用法を表すので非文となる)

If you **will** wait a minute, I'll be able to go with you.

(条件節中に will を使えば主語 you の意志、好意などを表す)

④命題が仮定される認識的用法：認識的用法においては、「仮定」の意味は命題にかかり、法助動

詞が表す法性にはかからない。根源的用法では「仮定」の意味は法助動詞が表す法性にかかる。

He **might** succeed if he did his best. (認識的用法：仮定の意味は he succeeds にかかる)

You **might** go out if it were not raining so hard.

(根源的用法：仮定の意味は you may go out にかかる)

⑤過去の命題内容を現在時から推量する認識用法：認識的用法においては、法助動詞そのものは過去の意味を表さず、根源的用法では法助動詞そのものが過去の意味を表す。

She **must [might/ could]** have broken the window last night.

(命題が過去の意味を表し、must/ might/ could は現在時の推量を表している)

She **couldn't** win first prize in the contest. (過去時における能力が否定されている)

3. can と may/ might/ could が表す実現の可能性

従来、Leech (1969:220-221) などにもとづいて、can は「理論的可能性(根源的用法)= 可能性」を表し、may/ might/ could は「現実的可能性(認識的用法) = 蓋然性」を表すと理解されてきた(以下の(a)(b)の例文の書き換えが、ともに認識用法のように見えても実は異なる用法であることを示している。(a)の不定詞は「事象」を表し真偽は確認されないが、(b)の節は「命題」であり、その真偽を確認することができるのである)。

(a) The Monsoon **can** be dangerous. (= It is possible for the Monsoon to be dangerous.)

(b) The Monsoon **may** be dangerous. (= It is possible that the Monsoon is [will be] dangerous.)

In the first pair of sentences, the notion of possibility is general and theoretical; but in the second pair, it is a more particular and theoretical kind of possibility, often in the future. Leech (1969:220-221)

そして、Leech (2004:82)で「現実的可能性 (may/ might/ could) = 蓋然性」のほうが「理論的可能性 (can) = 可能性」よりも実現の可能性が高く、(a) This illness can be fatal. (b) This illness may be fatal. では「医者が患者に(b)の文を言う」と患者は悲観する」と述べている。

‘Factual possibility’ is stronger than ‘theoretical possibility’:

This illness **can** be fatal. | This illness **may** be fatal.

The second of these statements is likely to be far more worrying than the first. It is not hard to see why this is: *can be fatal* merely postulates a theoretical possibility; *may be fatal* envisages the event actually happening. If a doctor used the second statement in addressing a patient, the patient would have reason to be pessimistic.

これに対して、柏野(2002:20) は以下の実例をあげて、can は「データに基づく客観的・一般的な可能性(general possibility)」を表し、may は「主観に基づく(根拠のない) 特定のな可能性(specific possibility)」を表すので、事象の実現の可能性はむしろ can のほうが高いと述べている。手術を受ける子供の腹膜炎の危険性を説明された父親の驚きは、It can be fatal. という発言がショッキングであったことを示している。

“How serious is peritonitis?” “Well, in young children it **can** be a pretty dicey thing.” “Meaning what? Can it be fatal?” “Well, sometimes in children ...” “Jesus!”

(E. Segal, *Man, Woman and Children*)

また、柏野(2002:30)は「may では次のように前言の可能性を否定するような文を後続させても容認性に変化はないが、can では容認不可能になる」と指摘して may より can のほうが客観的な根拠に基づくことを明らかにした。

Cigarettes **may** [***can**] be hazardous to your health; there are no data that show they are, however.

下の図は、以上の議論にもとづき「実現の可能性」に対する話者の確信の度合いを表したものである。数値は生徒向けの目安に過ぎないことに注意が必要してもらいたい。

can't < couldn't < could < might < may < can < should < ought to < would < must < will	(米)
0% 30% 50% 70% < will < must	(英)

4. can の用法の見取り図

法助動詞 can の用法は複雑で、用法の全体像を示しにくい。以下に、can の用法を根源的・認識的という観点と、「可能性」「蓋然性」という用語を用いて説明したい。

can	{	根源的用法	<ul style="list-style-type: none"> ①力動的法性（主語の内在能力） ②力動的法性（主語を取り巻く状況能力） ③存在的法性（データに基づく一般的可能性；主語の特性）
		認識的用法	④認識的法性（命題の真偽に対する話者の主観的判断（蓋然性）を表す）

根源的用法の can はいずれも It is possible for ... to do... の形に書き換えられ、認識的用法の can は It is possible that の形に書き換えられる。根源的用法は事象(event)を取り扱い、認識用法は命題(proposition)の真偽を取り扱う。①②③はいずれも根源的用法であるから、過去時における「内在能力」「状況能力」「データに基づく一般的可能性」は could を用いて表す。特に③の「データに基づく可能性；主語の特性」の場合、参考書や辞書にも混乱が見られるので注意が必要である。他方、認識的用法の④は発話時における話者の命題に対する「心的態度」（蓋然性に対する主観的な判断）を表す用法であり、ふつう否定文と疑問文の場合にのみ用いられる。命題の内容が過去時のものであれば、完了形にする必要がある（未来時の命題の場合、進行形にすることが多い）。しかし、平叙文では「蓋然性を表す can」は使用されず、could/ may/ might で代用するのがふつうである（もっとも柏野(2002:31-35)によれば「未来時における蓋然性」を表す場合、平叙文中の can を認めるインフォーマントも少なくないという）。

can の用法の概要

① 力動的	能力	<p>●can 「～できる」（現在備わっている能力）</p> <p>She can fix a TV by herself. (= It is possible for her to fix a TV by herself.)</p>
----------	----	---

法性 (内在能力)	依頼	●Can you～? 「～してくれますか」 (依頼) Can you tell me the way to the station? (= Is it possible for you to tell...?)
② 力動的 法性 (状況能力)	達成	●can 「～できる」 (現在の状況能力) You can get all kinds of things here.(= It is possible for you to get)
	許可	●can 「～してもよい」 (現在時の一般的許可) Can I use your bathroom? (= Is it possible for me to use ...?) You can't smoke in the hospital. (= It is not possible for you to smoke...)
③ 存在的 法性	可能性・ 主語の特性	●can 「～することがある」 (データに基づく可能性) Can gases freeze? (= Is it possible for gases to freeze?) Winter in Tokyo can be sometimes very cold. (= It is possible for winter in Tokyo to be sometimes very cold.)
④ 認識的 法性	現在時の 命題	● (疑問文) Can～? 「いったい～なのだろうか」 (蓋然性) Can the story be true? (= Is it possible that the story is true?) ● (否定文) can't 「～のはずがない」 (蓋然性) The story can't be true. (= It is not possible that the story is true.) (注) (平叙文) 「蓋然性」を表すcanはcould/ may/ mightで代用する
	過去時の 命題	● (疑問文) Can (S) have + pp...? 「いったい～したのだろうか」 (蓋然性) Can the child have done this? (= Is it possible that the child did this?) ● (否定文) can't have + pp 「～だったはずがない」 (蓋然性) It can't have been easy for her. (= It is not possible that it was easy.) (注) (平叙文) 「蓋然性」を表すcanはcould/ may/ mightで代用する
	未来時の 命題	● (疑問・否定文) Can (S) be doing...?/ can't be doing ... 「～することがあるのか」「～するはずはない」 (注) 未来に対する推量は進行形を用いるのがふつう: They can't be coming tomorrow. (注) (平叙文) 「蓋然性」を表すcanはcould/ may/ mightで代用するのがふつうだが, can 「将来～することがありうる」も使用可能. A third world war can break out at any moment.

5. 「過去の1回限りの行為の実現」を表す could

根源的用法の could が過去の意味で用いられるのは, ①過去における継続的な能力を表す場合, ②否定文・疑問文 (Yes/ No 疑問文) に用いられる場合, ③知覚動詞・認識動詞とともに用いられる場合, ④I'm glad you could come. のような glad の補文中に限られる. 「過去の1回限りの行為の実現」は was able to/ managed to/ succeeded in doing/ 過去形動詞で表すというのが通説である. F.R. Palmer(1974), Thomson & Martinet (1969), Swan (1995)はすべてこの立場である.

We use **could** for 'general ability' — to say that somebody could do something at any time, whenever he/she wanted. (**Was/were able** is also possible.)

She **could** read when she was four. (OR She **was able** to read . . .)

We do not normally use **could** to say that somebody managed to do something on one occasion. Instead, we use **was/were able, managed** or **succeeded** (in...ing).

How many eggs **were** you **able** to get? (NOT . . . **could** you get?)

I **managed** to find a really nice dress in the sale. (NOT I **could** find ...)

In certain cases, it is possible to use **could** to say that somebody was able to do something on one occasion. This happens with **see, hear, taste, feel, smell, understand, remember** and **guess**.

I **could** smell burning.

I **could** understand everything she said.

It also happens in some subordinate clauses.

I'm so glad that you **could** come.

In negative clauses, and with negative or limiting adverbs like *only* and *hardly*, we also use **could** to refer to one occasion.

I managed to find the street, but I **couldn't** find her house.

Swan (1995:105)

しかし、F. R. Palmer(1979)は a) I **could** just reach the branch. b) I **could** reach the branch because it was loaded down. c) I **could** get in, because the door was open.は「容認可能」と述べ、理由として「出来事が起こらなかった場合だけでなく、困難な状況の下で出来事が起こった場合、つまり起こらなかったも同然という含みがある場合も **could** は使える」からであると主張した。Declerck (1991)もこの立場に近い。これに対して堀内・ジョンソン(1988)は「アメリカ英語では継続的・一時的、いずれの場合でも **could** を用いることができる」、堀内・ジョンソン(1993)は「**could** は「予想に反して」という言外の意味を持つ」と述べ、I **could** pass the driving test.はアメリカ英語では容認されると主張した。いずれにせよ、通説では容認されない「過去の1回限りの行為の実現」を表す **could** が、ある限られた場面では使用されることが暗示されている。

柏野(2002:38-59)は **can/ could** の「能力」(根源的用法)には2種類あって、①肉体的・精神的な能力(力動的法性＝内在能力)(**capability**)と行為に必要な物理的状況が存在すること(力動的法性＝状況能力)(**opportunity**)があるという。後者の「状況能力」を表す **could** は **because** 節やその他の方法で必要な物理的な状況(好条件・悪条件)を暗示する語句を伴えば **could** は「達成感」を表し「過去の1回限りの行為達成」の意味で使用可能であるという。

could は、いわゆる「能力」の意味を表すのではなくて、「機会」の意味を表す。したがって、その **could** を使用可能にするには、状況を明示する必要がある。状況には好条件と悪条件がある。この悪条件には、好条件が文脈上 **imply** されているが、ときに、この好条件は文中に示されることもある。これらの好条件は何かが達成できたことに対する理由を述べる役割を果たし、それらは **because** 節(あるいはその代替表現)で表される。

I **could** get there by 5:00 because I got a lift from him on the way.

Even though I was caught in a traffic jam, I **could** still get there by 5:00 yesterday.

I **could** pass the exam this year because the overall level was low.

I didn't work very hard, but I **could** pass the exam.

また、根源的用法の **could** が過去の意味で用いられる I'm glad you **could** come.のような **glad** 補文中の **could** の例も、I'm glad you **could** come. I know how busy you must be. のように「慣用的に悪条件が **imply** されているから」と考えられると言う。「**could** + 知覚・認識動詞」はアメリカ人は好条件・悪条件を読み込んで **could see/ saw** を区別し、イギリス人は **could see = saw** とみなす傾向が

あり、結果的にイギリスでは **could see** を容認する人が多いことが指摘している。

しかし、鷹家・林(2004:58-59)では、確かに好条件を明示すれば **could** を用いて「過去の1回限りの行為達成」を表す文の容認度が高くなるが、その容認度はせいぜい40%程度であることが示されている。

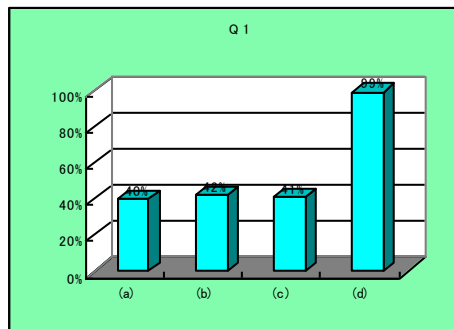
Q 1. He was able to catch the last bus. は容認されますが、次の(a)～(d)の表現を使用しますか。

(a) He **could** catch the last bus because he ran fast.

(b) He ran fast and so he **could** catch the last bus.

(c) He ran so fast that he **could** catch the last bus.

(d) I'm glad you **could** come. I know you are very busy.



5. will と be going to の使い分け

未来を表す法助動詞には **will**, **shall**, **be going to** などがあるが、ここでは柏野(1999:64-70)にもとづいて **will** と **be going to** の違いを考察する。通説では **be going to** は「現在の要因（意図や兆候）」に関心があり、**will** では「未来の出来事」に関心があるので、**be going to** には「現在志向性」、**will** は「未来志向性」があるとされている。その結果、「意志」の意味では、**be going to** は「前もってなされた決心」を、**will** には「その場でなされた決心」を表す。「予測」の意味では **be going to** は「出来事が差し迫っていて（証拠や兆候が現存するので）避けられないこと（不可避性）」を表し、**will** は「出来事が条件付で起こること（条件性）が知識や計算で推測される」ことが表される。

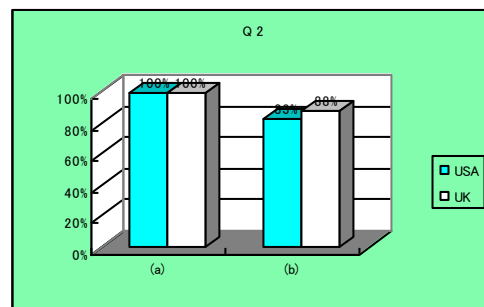
Use **will** when you talk about future plans that you make at the time you are speaking: "Oops. I spilled my juice." "I'll go get a paper towel." Use **be going to** when you have made the plans earlier: I'm going to go to the library later. Do you want to come along? When you talk about what you think will happen in the future, you can use **will** or **be going to**. However, you usually use **be going to** when something in the present situation makes it very clear what will happen next, and **will** when you are not so sure: Craig's going to be in big trouble when Mom finds out. / Marie will probably show up an hour late again. (Longman Advanced American Dictionary)

しかし、鷹家・林(2004:76)では以下の回答が得られている。「予測」に関するの上的ような区別は必ずしも顕著ではなく、あくまで「緩やかな傾向」ととどまることが推測される。

Q 2. 天気を予想する場合、次の (a)(b) の表現を使いますか。

(a) Look at that dark cloud in the sky. It's **going to** rain this afternoon.

(b) Look at that dark cloud in the sky. It **will** rain this afternoon.



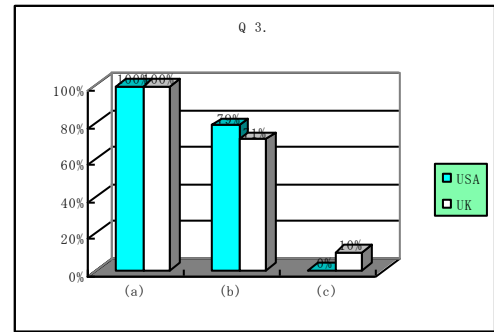
同時に行われた「意志」に関する調査でも、上のような区別は必ずしも顕著ではなく、あくまで緩やかな傾向にとどまることが推測される。

Q3. レストランで料理を注文するときに(a)～(c)の表現を使用しますか。

(a) *I'll* have (the) spaghetti, please.

(b) *I'm going to* have (the) spaghetti, please.

(c) *I'm (the) spaghetti.*



<参考文献>

柏野健次. 2002. 『英語助動詞の語法』. 研究社.

柏野健次. 1999. 『開拓社叢書 テンスとアスペクトの語法』. 開拓社.

小池生夫編. 2003. 『応用言語学事典』. 研究社.

鷹家秀史・須賀廣. 1998. 『実践コーパス言語学—英語教師のためのインターネット活用ガイド』. 桐原ユニ.

鷹家秀史・林龍次郎. 2004. 『詳説 PLANET BOARD』. 旺文社.

堀内克明・V. E. ジョンソン. 1988. 6月10日号. *The Student Times*.

堀内克明・V. E. ジョンソン. 1993. 4月30日号. *The Student Times*.

Coats, J. 1983. *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. Croom Helm.

Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha.

Palmer, F. R. 1979. *Modality and the English Verb*. Longman.

Leech, G.. 1969. *Towards a Semantic Description of English*. Longman.

Leech, G.. 2004. *Meaning and the English Verb*. (3rd ed.) Longman.

Swan, M. 1995. *Practical English Usage*. (2nd ed.) Oxford University Press.

Thomson, A. J. and A. V. Martinet. 1969. *A Practical English Grammar*. (2nd ed.) Oxford University Press.